わがまちの紙のルーツ

その四…明治から昭和へ

昭和五十六年六月五日号

明治二十八年以降、地元資本による機械製紙工場が吉原地区を中心に設立されていきました。

はじめワラ・紙クズを原料とした半紙まがいの紙を抄いていましたが、互いに技術を競いあい外国製品にも劣らない紙をつくるようになりました。

大正三年、第一次世界大戦がはじまると、日本の紙業界は空前の好景気になって、いっそう機械による抄和紙工場が続出しました。

大正一二年から九年までの八年間に県東部に誕生した製紙会社は三十社でそのうち十七社が吉原付近の会社でした。

現在の大製紙工場

大正末から昭和初期にかけて、国内の需要と輸出が増進し、製紙小工場の設立と、技術の向上はいっそうすすみました。大昭和製紙を創設した斎藤知一郎氏が製紙の経営に第一歩をふみ出したのも、この頃でした。

ミニ・メモ

紙のすかしは どうしてつくるか

紙を光にすかして見ると、人のかたちや景色など白くまたは黒くすけてみえるのが「すかし」です。

これは沙(すく)網に厚紙や針金などで型をつけておきます。沙く時、原料は網の上に平にのりますから、つけておいた型のところだけ原料がうすくのり、かわかすと白くすけて見えるのです。黒いのは、網にくぼみをつけておくのでその反対になります。